

# 春燈

12月号  
December 2018



主宰の句

安立公彦

水引の花の夕ぐれ鬼貫忌

窓に見る遠稲妻や旅の宿

朝寒の靴紐きつく結びけり

曲折の道や秋日を珠と抱き

持ち古りし鞆の手擦れ九月尽



# 安住敦の句

## 小でまりの愁ふる雨となりにつけり

『暦日抄』昭和三十八年

「五月六日、久保田先生急逝」の前書きがある。その日、数時間前まで師万太郎と同車していた先生にとつてまさに晴天の霹靂であった。こでまりは一緒に車の中から見た花である。深い悲しみが雨に打たれ揺れているこでまりから切々と伝わる。〈秋風や暦の喪より心の喪〉は百ヶ日を過ぎた時の句。癒されない悲しみの中、試練を乗り越え立派に主宰を継承して師恩に報いられた。

大室恵美子

# 安住敦の句

## 恋飛脚大和路の寒牡丹かな

『柿の木坂雑唱』昭和五十五年

歌舞伎「恋飛脚大和往来」新口村の梅川・忠兵衛を念頭に置かれての句である。前書きにある石光寺は奈良当麻の寒牡丹の名所。何よりもお好きな牡丹を眺めて居られて、雪中に比翼紋黒縮緬の死出の旅立ちの二人の姿を思い浮べられたのであろうか。しんしんと雪降る中、凜と立つ寒牡丹は切なくいと美しい。「恋飛脚」がそのまま景として句に取り込まれ、情趣を添えている。

尾野奈津子

# 燈下集



○ 本多遊方

鉢物に肥料ほどこし敬老日  
あぶれ蚊に刺さるる不覺とりにけり  
老若の僧の集へる良夜かな  
曼珠沙華二河白道の火の河に  
句を離れ蓑虫と化す父なりき

○ 武田巨子

水音の奥に水音新豆腐  
爽やかや齋主のたまふ伊勢ことば（守武祭）  
旧殿の櫓の瘦せの露けしや（伊勢御遷宮）  
秋納め神田太古の煙を上げ  
聖女にはあらず芋虫放りけり

○ 諸岡孝子

青墨の滲みて届く送りませ  
引売りのさやかに来る新豆腐  
鳴り砂の一雨ききて秋惜しむ  
夕潮に踵おろせり秋土用  
しのびごま秋灯ひとつ濃くおきぬ

○ 野崎昭子

こほろぎの音色に黙す老い二人  
母娘にて宿るは久し星月夜  
高枝に鳴いて名残の秋の蟬  
蝸の声やはらかし風に乗り  
秋深し須磨に伝はる一弦琴

○ 小泉三枝

雑踏に秋めくものを探しけり

白木槿ひと日に遂げること僅か

溺れてもみたし離島の天の川

だしぬけに変はる話題や曼珠沙華

らふそくの匂ふひと部屋野分あと

○ 宮崎裕子

しろがねの鯉ひるがへる水の秋

後れ蚊や観音経の摩尼車

五百羅漢の千の福耳つづれさせ

水琴窟秋水一掬こぼしけり

台風一過茜の空を残しけり

○ 平野加代子

ロボット掃除機の秋の夜長の舞踏会

何もかも知らぬふりして衣被

児と肩を触れ合うてゐる良夜かな

迷ふとは力あること蛇穴に

秋ざくら安堵の風を舞はせけり

○ 田嶋洋子

竹春や風の間に間の空の色

露草や小康得たる姉の試歩

月今宵いよよ清けき湖心かな(祝・『湖心』)

天界の父母酌むや衣被

弁解はすまじ白桃啜りけり

○ 菅澤陽子

ラッセラッセと踊る跳人や夕間暮

竿灯に男のロマンありにけり

竿灯の撓ひなだむる男帯

園児らも負けず花笠音頭かな

仙台的七夕飾りくぐり来て

○ 石橋公代

今生の濁世をよそに星月夜

蓑虫の蓑にこもりて風まかせ

秋天や覇者に敗者に応援歌

再会約す発車のベルや颯雲

紺青の空に浮かべり赤蜻蛉

春星賞受賞作（20句）

## 風の盆

立山を崇むる八尾水の秋

うすやみのつつむやさしさ白芙蓉

秋の鮎焼かれ芳香放ちけり

月代や男流しのひとりゆく

稲びかり町むらさきに浮かみけり

秋驟雨洗ひたてたる石畳

三味の音や月のひかりの潦

踊る手に花街のなごり鏡町

## 浅木ノエ

踊笠くちびる濡れてみたりけり

夜流しの過ぎて深まる虫の闇

身に入むや一夜の床几譲りあひ

月天心「風」の一字を帯に染め

闇に来て闇をひきゆく踊かな

露けしや問はず語りに相槌を

母許へ泣きにゆくかに風の盆

新涼や八尾の和紙の麻模様

初秋の旅信に代ふる地酒かな

ひとむらの風に追はるる赤とんぼ

夕霧や駅のホームのおわら節

風の盆身ぬちの風を鎮めけり

春星賞受賞作（20句）

## 介護日誌

藤丸

## 誠旨

輪飾や末広がりの室番号

壁に貼る入浴表や初暦

抗菌の手袋うすし冴返る

淡雪に痰のからみのゆるびけり

囀りや真昼こゑなき談話室

指で問ふ妻に答ふる臃かな

蜷の道身をひきずりし跡ばかり

後見とふ妻の代理や梅雨深む

涼しき声きくところまで白昼夢

「声欲し」と書きて形代流しけり

万緑の中へと押すや車椅子

鯛やバリアフリーの妻の城

天高し車椅子ごと量られし

負けん気の強きは血筋鴟の声

蚯蚓鳴く心読める日読めざる日

冬日中妻かなします下着替

晚餐とよびて聖夜のチューブ食

冴ゆる夜の帰心にふるる泪かな

烏雲に行く末といふ責負ひて

縫る身を抱きて寄りぬ花の窓



# 当月集

安立 公彦選



○ 西岡啓子

桔梗の明日咲くゆるびありにけり

指添ふる筆の久しき良夜かな

ふり返る帰燕の空の高さかな

秋雨やかがる糸選る手芸店

秋の日や砂のきらめく水の底

○ 小山繁子

秋天や雲の告げゆくメッセージ

恙なく昭和を生きてとろろ汁

身の丈を朱に染め雨の曼珠沙華

屋号もて呼び合ふ母郷秋灯

舫ひ舟寄り添ふ岸や月今宵

○ 神田恵琳

色変へぬ松の威風やしばし佇つ

藤は実にくくみの残る子の机

一休の頓智問答秋うらら

惜しみなく彩風にすや秋桜

参禅の歩に余りある秋思かな

○ 土屋光男

亡き妻と歩みし丘や草の花

病む友も仰ぎ見つらむ今日の月

教へ子と杯を重ねる良夜かな

残る虫八十路教師の家路かな

落日に芒燃ゆるや富士裾野

○ 物江康平

かんたんを聴きに来よ今汽車に乗り

物差の長きを持たぬ秋の風

晩節の師弟の情や吾亦紅

秋天に瘦せたる牝牛入賞す

役立たぬ案山子を立てて去りにけり

# 春燈の句

安立 公彦選

蚯蚓鳴く中仙道の一里塚

東京 池田 節

みすずかる信濃の里や蕎麦の花

知る顔もまばらの在所刈田道  
屋号もて呼び合ふ父郷曼珠沙華

ふるさとの畦を色どる曼珠沙華

秩父歌舞伎観に行く道の曼珠沙華  
友逝くや秩父名残りの蕎麦どころ

高原の空を埋めたる赤とんぼ

酔芙蓉あしたの紅をほの見せて  
日移るやをとこへしよりをみなめし

紫陽花の終の色とよ秋夕焼

長野 藤丸 誠旨

秋刀魚焼く匂ひや雨の路地となり

秋日和傾けて乾す鮪の桶  
父の齢今日越えにけり秋の月

別離とふ悲しみを知り蛇穴へ

秋草や橋は二本の杉丸太

東京 布村 松景

露寒や詮なきことは口に出さず

釣り暮れて月の影踏み戻りけり

芒野や鬼の泣き出すかくれんぼ

東京 木村 梨花

菩提寺へ一本道や曼珠沙華

地蔵盆浪花に住みし遠き日よ  
足裏癒えすすきの招く野径行く

埼玉 原田たづ糸

山門の松を透かして今日の月

台風去り秋蝶一家お出掛けか

宵闇や仏に灯す絵らふそく

中秋の名月嬉しをがみけり

隅田川に名の橋いくつ夕月夜

神奈川 新海 英二

音の無きひとりのたづき雁渡し



# 余言

安立公彦

しぐるるや古書肆の軒のほの明り

植田 利一

この「古書肆」は、神田神保町辺りに見るような軒を連ねた古書店ではない。落ちついた地方都市、その街の一隅に古くからある古書店だろう。

折から降り出した時雨はその街を包み、一軒のみ残る古書店を愛しむように降りつつむ。作者は街に出た帰り、いつものようにその古書店に足が向く。初冬の日はいつの間にか暮れかかり、「古書肆」の外灯がほのかに点る。この「ほの明り」が絶妙だ。充実した静かな時の流れが感じられる句である。

飛石に残る秋日を踏み行けり

中野あぐり

作者は昨年から今年にかけて、最愛のご主人と妹さんをもども失った。同時発表の句に、亡きことに慣るるは寂し花世がある。何とも切ない句だが、「寂し」が浮い

ていない。本格俳句だ。

掲出の句。敷地内に残る亡き妹さんの住まいへの通路だろうか。その「飛石」に午後の秋日がうつすらと差している。「残る秋日」を踏みゆく作者の胸中には、さまざまな思いが交叉していることだろう。「踏み行けり」という行動の率直な表現に、作者の深い思いが重なる。

エンディングノート買って安らぐ秋の虹 諸戸せつ子

この「ノート」は「遺言ノート」ともいう。「遺言」のような法的拘束力は弱いですが、代りに自身の終末の在り方や希望を残る人に託せる、と辞書にある。私の知人に、「自分の死後は墓への埋葬は無用、太平洋に散骨せよ」と言う人が居る、とその知人の身内に聞いたことがあった。

作者はいまこの「ノート」を手にし、「秋の虹」を仰いでいる。そのころは、「買うて安らぐ」とある通り、わが身の始末を残る人の迷惑にならないようにそのノートに書くという思いだ。物事のけじめをわきまえ、条理ある道を歩いて来た人らしい表現である。

小鳥来て胸の振子をゆらしけり 青柳 雅子

九月本部句会の句。「小鳥来る」は如何にも秋の澄んだ

大気を思わせる季語だ。「渡り鳥」の季語に収めきれない小鳥の飛来である。白鳥や雁の渡りには詩歌のうたごころがあるが、可憐な小鳥の舞う姿には平凡だが生活感が伴う。この句、「胸の振子」の表現がみごとだ。「ゆらしけり」に鳥のとぶ姿が再生される。

作者は「春燈」恒例の「万太郎研究会」の舞台を支える幹事の一人でもある。

虫時雨遅き夕餉の箸を置く 林 紀夫

秋の夜の、静かな時間の流れる一家の、一瞬の時を切り取ったような句である。

長かった秋暑もようやく治まり、夜寒さが日常を包む頃となった。作者は日中の用事で帰りが遅くなり、「遅き夕餉」を摂っている。ふと庭前に鳴く虫に気づいた。その一瞬を表現する「遅き夕餉の箸を置く」がみごとだ。例えば名優の演じる芝居的一幕を見るような思いである。

月今宵いよよ清けき湖心かな視(祝「湖心」) 田嶋 洋子

この「湖心」は、先般上梓された久保久子さんの第一句集『湖心』である。湖北に生れ、琵琶湖の澄明な湖面を明け暮れ見て育った久保久子さんの優れた作品が、読む人の心を捉える句集である。

田嶋さんはそれを「いよよ清けき」とする『湖心』の内

容を良く表している言葉だ。作者も昨年末に第一句集『七線譜』を上木した。十月初め、この句集に、上山永晃さんの「鶴翼」、神田恵琳さんの『聲音』を加えた四冊の句集の合同出版会が催された。いい祝賀会だった。

靴下に伝線はなく扇置く 呉 文宗

この句を見て、「伝線」という言葉に注目した。戦後の一時期、ナイロン製品の輸入で絹物が衰態していった。これは社会的事実として印象深いものがあった。

そのナイロン製ストッキングはよく伝線した。「伝線」は辞書にもある。「ストッキングなどが縦方向に線状にほころぶこと」とある。この言葉には昭和の思いが残る。この句、「扇置く」の所作が場面を引き締めている。

空つぼの虫籠夜を深めけり 矢口 笑子

虫籠がある。中に虫はいない。去年まではその虫籠で、鈴虫、松虫、馬追などが鳴き交していたのだろう。虫籠を詠んだ句は多いが、それを「空つぼ」であるとする場面設定をした句は見ない。そこにこの作者の持ち味を見る。

「空つぼの虫籠」は読む人の記憶に残る。「夜を深めけり」がその記憶を増幅する。一句を通して読むとき、深みゆく秋の風情が、実感としてしみじみと感じられる。